

3.6. 「ひったくり」遭遇記

時：1999年2月28日午後四時半頃。

所：Madridの地下公道。

その時何が起きたのか一瞬分からなかった。いきなり後から羽交い締めになれ首を絞められた。息が苦しい。声が出ない。もがくがはずれない。ますます絞めてくる。助けを求めようとするが声が出ない。前に小柄な二人(?)が出てきた。息が苦しい。Gパンのポケットに手の入るのを感じず。上着のポケットにも手が伸びる。どう仕様もない。それより息が苦しい。抵抗していれば誰か助けてくれるかともがく。誰も来ない。肩からリュックをはずそうとしている。苦しくて抵抗出来ない。誰も来ない。



これが聞いていたひったくりか。三人組だと聞いていたし。なら殺しはしまい、それにしても息が苦しい。殺されるかもという恐れは不思議に出てこない。もがくが首の手は離れない。リュックもはずされた。

長かった様だが二、三分か、良く分からない。急に喉元が楽になり、走り去る足音を聞きながらへたり込む。ここまで視野の記憶がない。最初に眼に映ったのはへたり込んだ路面のタイル。そう、ここは地下道の出口近くだったとすこしずつ記憶が戻ってくる。怪我は無いらしい。動けるようだが、しばらくへたり込んだまま何を取られたのかと考える。勿論ポケットの財布はない、リュックに余り金は無かった筈、パスポートもない、Credit Cardもない筈だ、ガイブブックや地図は良いとして、、、身をつけているもの以外、外せるものは全部取られたらしい。無一文とはこのことか。

遠くから見物人が遠巻きにこちらを見ている。眼鏡に気付く。但し、顔についていたか脇に落ちていたか覚えていない。意外にこわれても変形もしていない。血痕がついている。顔に怪我したのかとさするがもう出血はしていないらしい。

突然とへたり込んでみると、地下道でギターをひいていた若者が来て何か言っている。「大丈夫か」とでも言っているのか、分からない。そのうちに"contigo"と聞こえた。俺について来いと言っているらしい。警戒心が出てためらう。よろよろ立ち上がる。周りに何も残して居ないことを確かめて二、三步彼について行く。黒い服のもう一人が横にきた。また警戒。何か言っているか分からない。「Policeを呼んでくれ」と言うが声にならない。喉がものすごく痛い。黒服の腕章に"Policia"の文字が見える。警察かな、じゃ安心してついて行くか。「ついて来い」と言う。"Police"ならついて行くしかない。ギターの青年が「英語は話せるか」と尋ねる。「ok」と答える。「Policeだ。俺は見ていた(ことを報告していた)。ついて行け。」ついて行く。ギターの青年も来てくれるかと思ったが来ない。

地上に出てパトカーに乗る。何か聞いてくれるけどスペイン語が分からないし、声が出ない。広場の反対側で別の車に移される。(待っている間に時計を見たのか、16°30'過ぎだった記憶がある。)

そう、Retiro公園を出ながら、今日本は深夜過ぎだな、今年はこのあと公務の出張が続くなどか考え事しながら地下道に入ったのだ。地下道中央付近でギターの青年を目にし、前においてあった小銭投入袋を横目にして通り過ぎて出口に近づいていたのだ。考え事で油断があったのだろうか。後方に対する注意はゼロだった。Policeの車が動きだすのを待っている間に思い出す。リュックの中に手帳があった。入社以来使い慣れて来た小型の手帳が。再生できるか。

20分程待つて車が動きだす。出ない声を振り絞ってつたないスペイン語で「三人組だった」と言う。これは分かっているらしい。何か言っている。分からない。若い警官がつたない英語で言ってくれる。「二人は捕まえた」と。彼らは金が目的だから、抜き取ったあとは邪魔なものは川かどこかへ捨てただろう。「リュックは回収出来たのか」と聞きたいが通じない。声が出ない。もどかしいが待つしかない。

車は走る。警察本署へ行くのだろうと考えている。約10分、それらしい建物に入る。"Urgent"らしい言葉が見える。警察ではなく緊急病院らしい。そうか、出血していたからか。「水」を所望。相変わらず声は出ない。喉が痛い。飲み込むと痛い。五時過ぎか。

少し待つて医者が二人診てくれる。出血は鼻らしい。出ない声で問診に答える。名前、年齢、住所等々。最後に"Nervoesか"と聞く。"Non!"

そうなのだ。不思議に落ち着いている。やられている間も不思議にこわくはなかったし、ある程度観測する余裕もあった。どう言う訳かあの三人組に憎しみ感が出てこない。何故だろう。

英語がほんの少しと言う老年の事務婦人を介して尋ねる。"Rucksackは回収出来たか""Si,Si"ああ、あったのか！本当か？

極く簡単な応急処置で再び車、今度こそ警察本署へ。しばらく待たされて調べ室(?)へ。「これはお前のか」と品々。あるある、財布も、手帳も。Credit Cardも入っていたらしい。安堵感。

相変わらず喉は痛くて声が出ないけど、質問に答え調書に状況・場所・持ち物リスト等を記入して、、、。待合室で待てと外に出る。待つ、待つ間に考える。何故あの三人組に憎しみ感が生じないのだろう。頭を壁や床にぶつけられなくて良かった、健全だろうと安心感が戻る。金が欲しいならやっても良い。

結局カメラは戻って来ない。余りまだ撮っていないから後悔はしない。新品買うか、いっそ今回なしで済みますか。どうせ人物の入る写真は少ないのだから絵ハガキで済むし、一切写真のないのが今回の旅行の記録でもあるかと。

取られた品物の確認が続く。問題は現金の額。今日空港での入金が68000Pts、使った分を差し引いて67000Ptsと申告。現物は57000Pts。無傷だったからその位は良いとも思うが、三人組から回収したらしい別の財布から10000Ptsを埋め合わせてまでくれた。

午後八時過ぎ。相変わらず喉は痛いし、声が出ない。回収品を受け取ったと言うらしい書類八枚に署名して漸く解放。財布、手帳他概ね全品無事返してもらおう。

地下鉄はこう行くんだよと署の前で偉い人から教えてもらってホテルへ急ぐ。とりあえず帰って他の書類が無事なのを確かめなくっちゃ。食事はそれから。喉が痛い。前後を警戒しつつ急ぐ。今日は絵ハガキも何通か書きかなきゃと思いながらホテルに帰る。九時過ぎ。

警察の待合室で記録すべき事柄を考えていた。22時、手帳と絵ハガキを持って近くの魚レストランへ行く。貝のサラダ、白身の魚のてんぷらと赤ワインで今書いている。ここまで一気に書いてきた。

23時。料理うまかった。ウイーンでは望めない味。約5000円。飛んでもないスペインの初日だった。警察の待合室で考えていた。スペインは好きになりたい国、一日目にこんな目に会って嫌いにならなきゃいいがと。

教訓：後方への注意（時折振り返って周囲を確認）。速歩（余り沈黙思考して歩かない）。



その後の経過

三月一日(月)

起床五時。喉が痛い。声もまだまなならぬ。水を呑むのが苦痛。でも昨夜もあれだけ食べて飲めたのだから支障はあるまい。もともと喋れるようにはなると思うけど。体もあちこち痛い。肩のまわり、首まわり、格闘のあとだろう。幸い怪我はどこもない。運が良かったと思えてくる。市内散策、ただし観光気分になりきれないのか現場再訪したりで時が経つ。昼は現場近くの飲み屋で軽く。勘違いで貰い過ぎた昨晚の 10000Pts を返還に警察に行く。

夜。一日余り経って、奴等良く知っているんだなと感心する。この位で声は出ない、だけど死なない。憎いが、こういう「程度」を良く知っているらしい。今27時間経った。喉は痛みが和らいでいるが声はしゃがれたまま。

三月二日(火)

起床六時。喉の快復は緩やか。声はしゃがれたまま。T o l e d oへ日帰りバス旅行。

三月三日(水)

しゃがれ声が続く。喉もまだ痛い。しかし、かなりまともになって来た。朝、再び初日の公園に。Cafeから写真をやはり撮ろうと。眼が痒い。くしゃみも出る。喉の痛いのが辛い。スペインに杉があるのか。現場近くで目薬を買う。午後の列車でGranadaへ移動。

三月四日(木)

午前小雨、Alhambra ツアー。

三月五日(金)

喉はかなり楽。依然しゃがれ声。ただし、これは花粉症のせいかと考える。なにしろ四年ぶりの再発で重症なのだろう。日本への便りにもそう書く。朝バスでSevillaへ。

三月六日(土)

目薬のお陰で眼は楽、だが喉の不快感は残っている。夕方の列車でMadrid戻り。魚。

三月七日(日)

喉の痛み、しゃがれ声未だ残る。朝現場再訪、昼過ぎの飛行機でFrankfurt経由夕方帰宅。眼の痒みは軽減し、ウィーンにやはり杉花粉はないのかな、だが喉は相変わらずだ。

三月八日(月)

久し振りに出勤、昨年の耳下腺とは様子が異なる。声だから誰もが気付くのだろう、「声が変わだね」。但し、「医者に行ったら」と言ってくれたのは国際電話の相手(日本、アメリカ、韓国)が最初。自分ではかなりの声変わりだが電話でも僕だとは認識出来るらしく少しは安心。但し、今日はナースへ行く機会なし。耳下腺の時は本人も気付かず、久し振りに会った女房が最初に指摘して女房のありがたさを実感した。昼は、岡部と井上にすし屋で報告、彼らも被害経験があるらしいがさすがにびっくりさせてしまった。来週女房も驚くだろうな、「ひどい花粉症」とは言っているが。

三月九日(火)

朝一でナースに会う。It could be serious. See a doctor.と言われて急に深刻になる。彼女も言っていた、「よく訓練されている、声を出させない押え所、手加減をよく知っている」と喉の解剖図で説明してくれる。紹介してくれたのが何と昨年九月のDr. Ehrenberger。今度はRudolfinerhausへ行けと言う。知っている医者ならベストだと。それも道理と納得。約束は十五日(月)、何と俺の誕生日。それは幸運の印とナースは喜んでいる。医者に会うまでは喉をいたわれと。余り喋るな、大声出すな、暖かくしておけと。「何で約束した仕事をやらないんだ、時間外だって必要なら仕事しろ」と昨日Mr. Razleyに噛み付いたのはまずかったな、自分で約束したことを無断で反古にするようなのがなんでSection Headなんだとあきれれる。

三月十日(水)

五時過ぎ例によって唾液を飲込む時の喉の痛みで目覚め。但し、日に日に改善と思いたい。医者
に早く会いたい。頭の鈍重感も去らない。花粉症の症状に酷似していると楽観していたがウィーンに戻
ってもなくなる。酒の飲み過ぎか。今夜は酒断ち。

三月十一日(木)

喉の痛みは和らいでいるが、声はまだ。酒を断って見たが頭の鈍重感は去らない。関係はないか
も知れないがあると心配。とんでもないことの記憶が切れてるなんて誰かに指摘されたらショックだろ
うな。医者に会う前に樋口に電話するか。

朝一で樋口に電話、怒られる。初期治療の大事な時期に酒呑んで悪くした、外傷で慢性化の危険、
喋るな、優しくいたわれ、酒は駄目、急性の咽頭炎だろう、女房に報告して薬持参頼め、等々。気が滅
入って来た。魚、いか、たこ、貝等海の幸が久し振り美味しく美味楽酒したか。花粉症だと楽観し過ぎた。
「外傷」の発想がなかった。女房に電話、「遭遇記」メール。かなり upset させた。

再来週の Cairo 会議、参加中止の可能性を主催者 AAEA の Mr.Barakat に Fax で打診。

三月十二日(金)

「声改善」と秘書、井上、独語先生他。ただし、頭の鈍重感とれず。

Mr.Barakat から「ぜひ出席を」と要請。俺も行きたい。マイク使ったら出来ると思う。

三月十三日(土)

嚥下時の不快感はかなり緩和。ただし、頭の鈍重感とれず不安感。特に、嚥下時に右前頭部に微
かな衝撃感。熱はと思うが体温計見当たらず。駒に Fax。

三月十四日(日)

喉の痛み緩和。昨日までは朝の体操で屈伸運動時に喉から隙間風が漏れるような音が時折あった。
今朝はない。改善の兆しと思いたい。但し、まだ不十分か。かたむけ時きばると上から漏れる。下が細
いのは上から漏れる所為か。右前頭部に嚥下時の軽い痛みは残る。

三月十五日(月)

医者面会 Dr. Ehrenberger at Rudolfinerhaus。「心配ない。もとに戻るが、訓練が要る。明日 A K H
に來い。Fiber Test も明日。来週の出張は構わない。」

少し気を持ち直す、が鈍重感依然、これが不快。

三月十六日(火)

Dr. Ehrenberger, Dr. Denk. 内視鏡、声帯左に出血跡へマトーマ・動き緩慢。3/19(金)再診で経過
観察、発声訓練要否はその時判断、へマトーマ軽減なら良い、消滅まで二週間程度か。声は戻るだろう。
午後 CT。結果は金曜?来週出張講演は可、但しマイク使用。内服薬処方。「酒は?」と聞くと「出来れば
控えたら、でも難しいかな」と優しい。

三月十九日(金)

A K H再診 Dr. Denk. E 同行。改善方向。次回二十九日(月)。発声指導。ゆっくり、大口で、声を
低く、水を飲みながら、事前に舌・口唇運動、声は戻る、等々。「酒断ち」十日。

三月二十六日(金)

カイロ最終日。会議後の Luxor 一泊旅行から戻り、疲れてホテルに沈没。低音はかなり戻るも高
音はかすれて未だし。大声も出ない。街中では5メートル先の女房に声が届かない。

三月二十七日(土)

ウィーンへの機上。2.5時間遅れて18:30離陸。時に右上前頭部や右首筋が錐を刺すように
痛む。飲込む時に多い様だがそうとも限らない。喉とは無関係で格闘時にひねった所為かと思うがわか
らない。気になると言えば気になる。日本の医者に診て貰うかと女房。症状続くなら、北京のあとの西
安・敦厚を断念するかと一瞬考える。だがやはり行きたい。

三月二十八日(日)

今日で事故から丸四週間。昨日の右上前頭部や右首筋が錐を刺すような痛みは一過性らしい、今朝はない。カイロの空気の所為か。飲込む際の右首筋の違和感は依然。

三月二十九日(月) A K H再診。「酒断ち」二十日。

へマトーマ減少、しかし左声帯の動きは依然緩慢。Dr. Denk は months より weeks のオーダだろうと楽観的。神経が傷んでいるので時間がかかる。辛抱強く待つしかないと言う。前回処方の内服薬は一週間で終わり、今日からは神経に栄養剤ビタミンBを飲めと。次回四月十三日(火)

三月三十一日(水)

声かなり改善。女房も岡部も Cairo から一週間振りの Mr. Csik もそう言う。自分でも少し高音が出る様に思う。もう快復を確信する。ビタミンB剤の効果だとすると、よく効くものだと思う。一ヶ月でここまで快復、日本に帰る二ヶ月後には殆ど全快かも知れないと期待。ただし、声帯はどうか。それまで「酒断ち」が続くか。女房「元気になる酒を飲む。全快する前に再度スペインで締め直して貰うか」だと。

四月二日(土) 女房帰国。

四月七日(水) 声改善かなりはっきり。演歌の中音も。電話で気遣ってくれた相手も「もう普通」と。ただし、高音や大声はまだ。遠くへ届かそうとすると高音になってかすれて来る。北京の会議はやはりマイクか。

四月八日(木) 「酒断ち」三十日。

四月十三日(火) A K H再診。Dr. Denk 「95%快復、次回は確認のみ 5/17。」

左声帯の動きもほぼ正常に見える。嗄声消滅が先かと予想していたが。へマトーマもごく小さい。優しい先生なので酒の質問は控える。「もう良いんじゃないか」と言うに決まっている。断酒の決心が揺るぐから聞かない。今日で五週間、五月一杯続けたい。

Dr. Ehrenberger も立ち会ったので耳下腺手術跡の発汗について尋ねる。「術後一年、九月に診よう。」あと、Dr. Burian に会って保険金処理未済みの件で調査依頼。

「酒断ち」のせいか食欲が進む。今までの弁当量では不足。夜も多め。体重増?

四月十八日(日) 「酒断ち」四十日。公務の中国へ出発。ビジネスクラスのワインが誘惑。水で我慢。

四月二十日(火) 会議開始。マイクの助け殆ど要らず。殆ど正常ではないか。

四月二十八日(水) 「酒断ち」五十日。西安から敦煌へ。中華料理に少々飽きつつあるが西洋料理よりは余程益し。

五月二日(日) ウィーン帰着。体重 56kg は正常。

五月八日(土) 「酒断ち」六十日。

五月十七日(月) A K H再診。Dr. Denk 「全快、異常感じなければもう良い。」

左声帯の動きも正常。ごく小さいへマトーマは胃の所為だと言う。とすると従来からこれはあったのか。何れにしる「酒断ち」解禁の青信号。あとは精神力で六月一日の解禁日を待つのみ。

五月十八日(火) 「酒断ち」七十日。よく続く。来週の韓国が難関。

五月二十八日(金) 「酒断ち」八十日。韓国到着翌日「母逝く(5/23)」の報。

六月一日(火) 「酒断ち開け」八十四日目。

東京、富山、駒、帰唄機上で酒、「酒」。帰唄直後「敏郎逝く(6/5)」の報。部屋にどこから入ったか、小鳥の死骸。帰唄後再度「酒断ち」、但し、気負いなし。